



加正

A HAPPY NEW YEAR

『俺の親父はね・・』と、父が言った。

私は、思わず父の顔を見返した。大正生まれの父の口から、自分の父親について何にしろ、話を聞くのは始めてのことである。

父の父、私の父方の祖父は、私が生まれるずっと前に亡くなっている。

私が物心ついた頃にはもう、父の在所の仏間の壁に掛けた、恐ろしく古めかしい2枚の写真の内の1人となっていた。もう一枚はやはり古めかしいけれど美しく若い女の人のもので、父のただ一人の妹のものだと聞いていた。

私は子供の頃、写真を眺めてはその美しい女性に憧れを抱いたけれど、その写真は現実離れなほど古めかしくて、実際に生きていた人とはどうしても考えられず、祖父にいたってはその写真の人であること以外の何でもなく、また誰一人として、私に祖父の話をしてくれる人は無かった。いつのまにか、私にとってその写真の中の人々は謎に満ちた存在になっていた。

私は謎は謎のまま、ふれることは無かったし、今に至ってはもう他に聞く人もいない。

何十年もの沈黙を破って、ぼつりぼつりと父の口から語られた祖父の話には、私が長い年月想像したようなミステリーはなかったけれど、昔祖父がお寺の住職だったこと。道楽が過ぎお寺を人手に渡すはめになり、夜逃げ同然に今の町に逃げて来たこと。そして戦争が終わった頃72才で、亡くなったこと。偶然最期を父一人で看取った時、祖父が突如息を引き取ったということ。ただ一人の妹は、戦争中に預かっていた子供たちを救おうとして火の中に飛び込んで19才の若さで命を落としたということも話してくれた。

明治や大正に生まれ生きて、そして死んだ写真の人たちが今やっと、私の中で生き生きと動き始めた。

父は、今年、明治生まれの祖父が亡くなった年を追い越そうとしている。

Milk Hall Times 41st

ANTIQUES

第二回

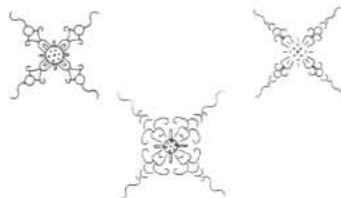
東昌月通信

銭湯とタイル

うんと寒い日に、銭湯に駆け込んで、脱衣所のガラリ戸をパッと開けると、目の前が真っ白になる程の湯煙が立ち込め、ふわ〜と湯気につつまれた体が暖まってとてもいい気持ちになります。その湯煙が上の方からフ〜と降りてきて、天井には水滴がいっぱいついた天窗。壁には原色で描かれた富士と天女と三保の松原の絵。浴槽に貼り分けられたモザイクタイルの模様、洗い場にはやっぱりタイルで縁どられた鏡。そんな部屋の様子が徐々に目の前に現われます。色んな人達を眺めながらゆ〜りと湯舟にはいる。脱衣所の高い天井には扇風機がゆらゆら回り、壁や柱に様々なタイルの装飾が施されて、モダンとも悪趣味ともつかないがけれど、何とも言えない愛着の沸く光景です。このタイル貼りが最初に私達の生活に入ってきたのが大正の頃の銭湯だということなんです、それまでにくらべてメンテナンスが楽だったというのが盛んに使われる様になった理由なのでしょう。銭湯のタイルの流行が大正デモクラシーの自由で活発でモダンな空気を、相変わらずお風呂好きの現代まで伝えてくれたようです。大正時代の頃から人々に親しまれるようになったタイルですが、日本のタイルの原型は、建築材料としての敷瓦をタイルのルーツと考え、仏教伝来の頃7世紀まで遡っていきます。当時の仏教建築の史跡には色々な敷瓦が残っています。その後、室町時代の頃にはお茶道具として鑑賞用に使われるようになり、明治以降には、ヨーロッパ式の生活の中で高級品としてマントルピースなどの装飾に施されその後昭和初期の文化住宅の流行で一般の住宅の風呂や便所、流しをタイルにするようになってきたようです。



日本中に、まだまだモダンで怪しげなタイル貼りの銭湯は残っていることですが、ミルクホールのお勧めは巨大な銭湯のような箱根富士屋ホテルの地下の温水プールと、ホテルのタイル貼りの化粧室です。古くてちょっと不気味ではありますが、銭湯とタイル好きには必見の場所です。



日本のタイルの原型 17世紀 瀬戸、定光寺 源敬公廊の敷瓦文様

